



荒井良二《名前が知らないわたしと誰かが聞いている》2023年 ©Arai Ryoji

vol. 109

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

ccma_jp ccma_jp

【編集・発行】千葉市美術館 〒260-0013 千葉市中央区
中央3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba
260-0013, Japan <https://www.ccma-net.jp/>
【発行日】2023年9月20日
【印刷】株式会社 エイチケイ グラフィックス



千葉市美術館ニュース「C'n」(シーン) 109号



荒井良二《逃げる子どもI》2010年 ©Arai Ryoji

館長のつれづれコレクション案内

空の旅がもたらした新しい視覚



恩地孝四郎

「空旅抒情 3-高度三千」

1938年 木版・紙 41.8×40.8cm

千葉市美術館の周りを歩いていると、上空を通過してゆく飛行機をよく見かけます。その姿は、今、その飛行機で旅をしている人のこと、これまでの自らの空の旅のことなどへと心をいざないます。

千葉は民間飛行場発祥の地。1910年に海軍での飛行機研究をもとに自ら設計した飛行機を自力で完成させて、飛行に成功した奈良原三次男爵が、1912年に稲毛海岸を飛行練習場としたのが日本で初めての民間飛行場であったとされています。奈良原男爵の最初の飛行は高度4メートル距離60メートルであったといいますが、欧米の航空機の発達を意識した日本政府は、まずは郵便を早く届けるため郵便飛行に力を入れ、1919年10月に東京—大阪の往復飛行に成功。1920年代には旅客と貨物を載せる民間航空会社の定期便が登場するまでになりました。

近代化によって、明治期に鉄道がもたらされ、それまでなかったスピードで移り変わる車窓の景観を体験した人々は、大正期には飛行機からの新しい視覚世界と出会うことになったのです。

当館が所蔵する恩地孝四郎の「空旅抒情」シリーズは、1928年に大阪朝日新聞社の企画で、恩地が北原白秋と福岡県柳川へ同行し、初めて飛行機に乗った感動をもとにした作品です。恩地は7月23日に柳川近郊を、24日に三井郡太刀洗から大阪までを飛行し、この体験を詩画集『飛行官能』（1934年 版画荘）として発表しました。同書は、箱に「詩・写真・版画による綜合作」とあるように、恩地が詩と木版画を制作し、プロカメラマンによる写真を組み合わせて、離陸から着陸に至る一連の物語を作品化したもの。書名にある「官

能」ということばが恩地の飛行体験の印象を如実に表しています。1頁目に横書きでただ一行「太古からの人間の空想—空ヲ飛ブコト—智慧はそれを実在とした」とあり、次ページから、静止したプロペラや躯体を詩、絵、写真で描写した後、離陸を「滑走 疾走 疾走シ去ル地面 浮キ上ガル躯体 墜落スル草・原・家・森」と表し、上昇に従い地上の家や道路などに人の営みとその歴史をみつつ、森、海、湖、空に見える虹に自然のたたずまいを感じ、高度が高くなるにつれて、細部が視認性を失い景観が抽象化していく体験をしていることが窺えます。「海は ひろく ひろく ひろく ひろく 波は こまかく こまかく 貫く湖 あるは また 海のなかの ひそまる島 『しづかなる航海』 高度1000」、水平飛行については「耳にひびくは とほき世の子守唄 眠はしづかに額をつつむ ねむりのなかに泛む肉體 音はすべて消え ひびくはとほき子守唄 とほき世の母のこゑ」とあって、浮遊感に、幼児の記憶が重なっています。

ここでご紹介している「空旅抒情 3-高度三千」は、軽い色彩と柔らかいかたちで眼下に広がる雲や、流れる気流などが感じられ、初飛行から時を経て、実体験の具体性が薄れ、恩地の内面にとどめられ反芻されて、巧みことなく生まれた抽象的形象であるように思えます。恩地は、1934年刊行の『海の童話』の帯に「絵画は何時まで描写に虐げられているのか」と記すなど、具体的な対象の描写に終始する絵画のあり方を批判し、抽象の可能性を提唱していました。飛行体験は色と形による詩的な表現の実在性を感じさせるものだったのかもしれませんが。

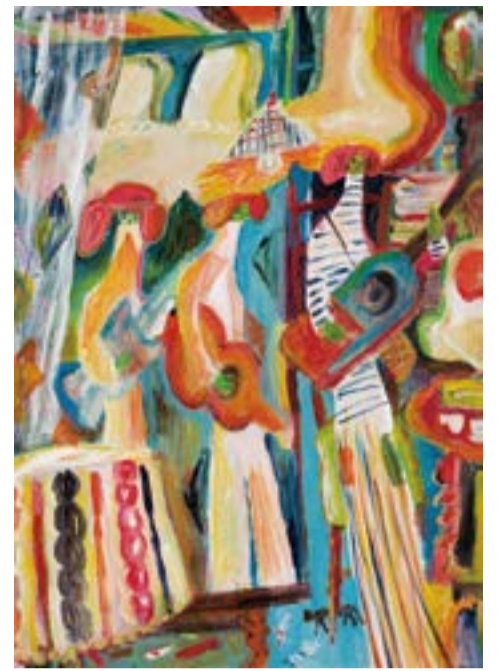
【館長 山梨絵美子】

new born 荒井良二

いつもしらないところへ たびするきぶんだった

担当学芸員インタビュー

児童文学のノーベル賞と称されるアストリッド・リンドグレン記念文学賞を日本人として初めて受賞し、国内外で注目を集める荒井良二さん(1956-)。常に「いま」を見つめて制作に取り組む荒井さんの魅力を十分に伝える展覧会が、10月4日より始まります。荒井さんの作品の魅力や展覧会の見どころを、担当学芸員に聞きました。



荒井良二《絵の中のぼくとぼくの中の絵》2023年 ©Arai Ryoji

—はじめに、荒井良二さんとの出会いについてお聞かせください。

千葉市美術館と荒井良二さんとの関係については、定期的に開催しているブラチスラバ世界絵本原画展(以下、BIB展/スロバキアで2年ごとに開催)にたびたびご出品いただいているというご縁がありました。これは20年ほど前に国内で継続して紹介するという企画がもちあがって、以来担当してきた展覧会です。

荒井さんの絵本はもちろん知っていましたが、このような経緯から、私にとっては絵本以上に原画作品との出会いが強く心に残っているといっけいかもしれません。輝くようなエネルギーに満ちた色彩と、いつ見ても新しい発見のある細部が、一つの画面に存在する原画を間近で目にするたび、荒井さんと荒井さんの作品についての興味が深まってきました。

—これまでのBIB展の中で、特に印象に残っている荒井さんの作品はありますか？

BIB 2007(2008年に開催)に出品された『ぼくのきいろいバス』(2007年、学習研究社/現・Gakken)の原画はとても輝いて見えました。BIB 2009(2010年に開催)の『えほんのこども』(2008年、講談社)もたいへん魅力的でしたが、BIB 2011(2012年に開催)の『うちゅうたまご』(2009年、イースト・プレス)は、その制作方法にまず驚かされました。この絵本は、ライブペインティングを段階的に写真に撮って印刷した校正紙に、さらにドローイングを施して原画としています。展示させていただいた5点の原画のうち1点には、腕を伸ばしてまさに大きな絵を描いている最中の荒井さんが写り込んでいて…。なんて自由なんだろう、絵本の世界は…と思いました。

BIB展では、世界中の様々な絵本のイラストレーションを見ることができます。それらの中には、ずいぶん実験的な技法や表現も多く、毎回楽しみにしているのですが、荒井さんのこの作品には、当時かなり衝撃を受けたのを覚えています。

今回の荒井さんの展覧会を準備していくなかで気付かされたことですが、ちょうどこの頃(2009年以降)、アーティストとしての荒井さんの表現が、変わっていくことになるんですね。

—2010年には、故郷の山形で絵画やインスタレーションなど幅広い表現をみせる展覧会「荒井良二の山形じゃあにい」を開催していますね。のちに芸術監督を務める「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ」(2014、2016、2018年)につながっていきますが、最初はふるさとの展示を断ろうとしていたというのは意外でした。

展示の企画は賛同できるけれども、「生まれ故郷で展覧会をする」ということが嫌だったから*、とおっしゃっています。生まれ故郷だからこそ、この土地を知らない自分が生半可に引き受けてはいけなくて思った*、とも。結局は、故郷の山形のことを、今の自分の目で新たに発見する旅にしようというように意識を転換して、監督を引き受けられます。この「山形じゃあにい」が一つのきっかけとなって、その後の荒井さんのお仕事が展開していくのだと思います。

—絵本だけでなく、舞台芸術や音楽に至るまで多様な表現に挑戦している荒井さんですが、「ぼくはいつも『ぼくの絵本フィールド』に立っている*」という言葉に、絵本を愛しているんだな、すごくいいなと思いました。

「絵本もつくる人」と、ご自分のことを表現されることがありますが、ずっと絵本から離れずに来られましたよね。何をやっても絵本の世界に戻ってくる。私は2016年と2018年の山形ビエンナーレにうかがったのですが、芸術祭自体が巨大な絵本みたいだなと思いました。山形という土地とそこに暮らす人々、歴史や文化を探りながら、物語をみんなで編んでいき、ひと続きのページに展開させていく、そんな感覚を覚えました。実際、2018年の「山形ビエンナーレ」では、絵本『山のヨーナ』が生まれています。「ヨーナの

小屋」を中心とした山形ビエンナーレでのインスタレーションは、今回の展覧会でも再構成され、見どころの一つとなっています。

—そのほかにも、荒井さんの絵本は、社会の出来事がきっかけとなって制作されているものがいくつかありますね。

展覧会に先立ち、山形のアトリエでインタビューをさせていただいたのですが、「いつでも社会現象に感化される自分でいたい」という荒井さんの言葉が、とても印象に残っています。現実社会や人々の暮らしを寄り添うように見つめ、何か大きなアクションを起こすというより、ひとこと言葉をかけてあげたり、別の方向に目を向けるようながたり、そうやって、そっと背中を押してくれる絵本も多いかなと思っています。

今回、全ページの原画を紹介させていただくのですが、東日本大震災の発生した年の暮れに刊行された『あさになったのでまどをあけますよ』(2011年、偕成社)では、窓を開けて外を見てみるとそこにはいつもと変わらない朝がある幸せがあつて、当たり前のように自分が暮らしている街に目を向けてみることの大切さに気付かされます。荒井さんと荒井さんの作品は、今ここで生きていることと未来を、全力で(でも大声は出さずにいつものトーンで)肯定しようとしているようで、そういうところも私は好きです。

—改めて、今回の展覧会の見どころを教えてください。

今回はなんとといっても「new born」ではないでしょうか。荒井さんほどの仕事をして来られたアーティストが、new bornってどういうこと?? って、思いませんか。

—そのタイトルも気になっていました。

しびれますよね、このタイトル。今回の巡回展の立ち上がり会場である横須賀美術館の会期まであと数ヶ月という頃の打ち合わせに、荒井さんが持ってきてくださいました。荒井さんの中では

急に出てきた言葉ではなく、ずっとこの「日々生まれる」「新しい気持ちでつくっていく」という感覚で制作されてこられたのだと思います。

また、新作のインスタレーションには、『旅する名前のない家たちを ぼくたちは古いバケツを持って追いかけて 湧く水を汲み出す』という、ずいぶん長いタイトルがついています。自分の手にある「古いバケツ」(自分が今までやってきたこと)をもって、これからの社会や自分自身に起こることに向き合っていく。これは作品のタイトルであると同時に、今回の展示の組み立てかたそのものであるともいえそうです。

—このタイトルには、bornから骨(bone)が連想されて、さらには盆(ボン)踊りというダジャレが隠れているとうかがいました。荒井さん独自のユーモアが感じられます。

ユーモアと、知らないところへ飛び込んでいく軽やかさ、いつでもパスを出せるその姿勢を支えているのが、荒井さんが折に触れて言われる「いつも準備をしている」ということなのかもしれないと思っています。

*「new born 荒井良二」展 図録に掲載されている荒井さんの言葉から引用

【話し手:主任学芸員 山根佳奈、聞き手:学芸員 山下彩華】

new born 荒井良二
いつも しらないところへ
たびするきぶんだった
会期 2023年10月4日[水]~12月17日[日]
会場 8・7階 企画展示室ほか
休室日 10月10日[火]、23日[月]、
11月6日[月]、20日[月]、
12月4日[月]
※第1月曜日は全館休館
詳細はホームページよりご覧ください



荒井良二『POSTじゃあにい』いつたことのないたびにでよう 2020年 ©Arai Ryoji



荒井良二『あさになったので まどをあけますよ』原画 2011年 ©Arai Ryoji



荒井良二『旅する名前のない家たちを ぼくたちは古いバケツを持って追いかけて 湧く水を汲み出す』より 2023年 ©Arai Ryoji 撮影:池田晶紀



「つくりかけラボ12 三沢厚彦|コネクションズ 空洞をうめる」

レポート 空洞は埋められる？ 生まれる？

彫刻家の三沢厚彦さんによる「コネクションズ 空洞をうめる」は、千葉の街から着想を得たプロジェクトです。来場者によるオープンワークショップや、三沢さんによる滞在制作、「コネクションズ」のメンバーであるゲストアーティストによる公開制作とあわせて、日々変化する空間をレポートします。

オープンワークショップ



三沢さんの木彫りから出た木端こぼを使って、千葉の街の「空洞をうめる」作品をつくるワークショップを開催。いつでもだれでも参加できるオープンワークショップです。会場に設けられた棚にはたくさんの作品がずらり。



プロジェクトはまだまだ続きます！最後にはどんな空間になっているのでしょうか。お楽しみに！

つくりかけラボ12
三沢厚彦|コネクションズ 空洞をうめる
会期 2023年7月14日[金]~10月15日[日]
休館日 第1月曜日
会場 4階 子どもアトリエ
観覧料 無料



アーティストによるイベント

三沢厚彦さんによる滞在制作

廊下の奥のスペースには、三沢さんが制作を行う机があります。三沢さんは、ひんぱんに来館され、ここで粘土を使った作品をつくっています。いくつかの作品は焼成する予定だそうです。できあがりを楽しみます！



八木良太さんによる公開制作

8月11日~13日に、ゲストアーティストの八木良太さんの公開制作を行いました。3日間にわたり、「音」や「空洞」に関連する新作を制作。できあがった作品は、「空洞をうめる」新たな要素として会場に展示されています。



志村信裕さんによる公開制作

8月1日に、ゲストアーティストの志村信裕さんの公開制作を行いました。三沢さんがつくった筒状の造作物に、志村さんが持ってきた昭和の磨りガラスをはめ、くらの映像を投影。すずしげな印象が広がります。



荒澤守さんによるドラマリーディング

俳優の荒澤守さんが、会場内で中島敦『山月記』をもとにしたドラマリーディングを行いました。虎をめぐる物語は、「空洞」というテーマや「ANIMALS」にもつながり、息を呑むパフォーマンスが繰り広げられました。



次回予告 /



「つくりかけラボ13 黒田菜月|野鳥観察日和」

プレワークショップ「鳥の名前を届ける」を開催しました！

第13弾の「つくりかけラボ」は、写真家の黒田菜月さんをお招きし、「見る」ことを考えるプロジェクトを展開します。このプロジェクトに先駆けて、5月21日に、習志野市谷津干潟自然観察センターで「野鳥を観察する」プレワークショップを開催しました。ワークショップのようすは、プロジェクトのなかで映像作品として展示されます。どのようなワークショップとなったのでしょうか。写真とともにレポートします。

[テキスト:学芸員 庄子真汀、写真:大中道彬浩、張玉ティ]

ワークショップには、6人の方が参加しました。「野鳥を観察する」という内容ですが、今回は方法が少し変わっています。「観察係」と「記録係」に分かれてペアを組み、「見ること」と「記すこと」を分担して野鳥観察を行うのです。

*

観察係は、南船橋駅に集合。双眼鏡とトランシーバーを持って干潟周辺を巡っていきます。鳥を見つけたら、すかさず記録係に連絡。体の大きさやくちばしの長さ、足の長さ、羽の色など、鳥の特徴を記録係に伝えます。記録係は、自然観察センターに集合。干潟がまったく見えない部屋で、観察係からの連絡を

ひたすら待ちます。トランシーバーから声が聞こえると、観察係が見ている鳥を知るべくさまざまな質問を重ね、記録用紙にメモやイラストを残していきます。

*

おたがいの顔もわからず、おたがいの見ているものもわからないまま、分業制の野鳥観察は続きます。2時間半ほど経ったところでようやく合流。午後は、記録係が残した記録用紙をもとに、ペアごとに対話をしていきます。鳥の特徴は伝わっていたか、たしかにその鳥で合っていたか、実際にはどんな景色が見えていたのか、おたがいの認識を擦り合わせるようにじっくりと言葉



*

が交わされました。ここであらわになったのは、やはり視覚を共有することの難しさです。鳥の特徴は伝えることができても、その鳥がいる景色までを緻密に思い描くことはなかなかできません。一方で、特徴的な鳥をばっちり共有できたペアもあり、そのよこびはひとしおのようでした。最後に、6人全員で集合して振り返り。ペアで野鳥観察をするなかで、もっとも印象に残った鳥を発表しあいました。

観察係は、双眼鏡のさきに見える景色に集中し、記録係は、観察係が見ている景色を想像する。そうすると、野鳥観察における「見る」という行為だけが、強く濃く抽出されます。本来ならばひとりで完結する野鳥観察を、わざわざふたりで手分けして行うことで、ふだんとまったく違った「見る」が実現したようです。手探りで野鳥を観察する6人のすがたから、「見る」とはどういうことなのか、はたしてそれは当たり前で容易な行為なのか、快く前向きな行為なのか、考えてみることもできるのではないでしょうか。会場で、ぜひ完成した映像作品をご覧ください。



つくりかけラボ13
黒田菜月|野鳥観察日和
会期 2023年10月28日[金]
~2024年1月28日[日]
休館日 第1月曜日、12月25日[月]、
12月29日[金]~1月3日[水]
会場 4階 子どもアトリエ
観覧料 無料



みんなで！ どうぶつデー

「三沢厚彦 ANIMALS / Multi-dimensions」に関連して、8月19日に「みんなでどうぶつデー」を開催しました。ひさしぶりの夏のイベントは、謎解きゲームと木版画多色摺体験を実施。美術館全体を使った創意工夫あふれる内容をレポートします。

謎解きゲーム



美術館の入口にガチャガチャの機械が登場！ カプセルのなかには「導きの地図」が。地図をたどって、美術館全体に散りばめられた謎を解いていきます。



リーフレットには、展覧会や作品にまつわる謎がもりだくさん。千葉市美術館の特徴でもあるスペースの多さを、感じていただけたのではないのでしょうか。



合格

謎がすべて解けたら、ゴールで答えを提出。記念のバッジをもらいます。たくさんの方にご参加いただきました！

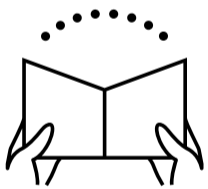


木版画多色摺体験



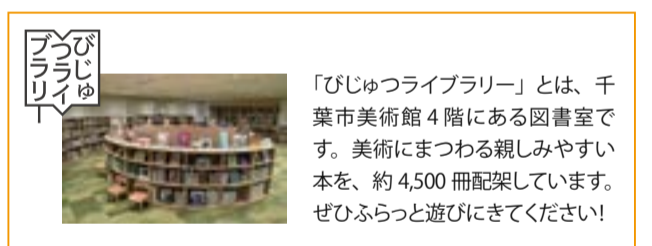
木版画多色摺体験は、美術館ボランティアによるオリジナル企画。会場には複数のブースが設けられ、それぞれで違う図柄が摺ることができるようになっていました。ボランティアさんの手厚いサポートで、はじめてでも安心。ふだんはめったに触れる機会がない専門的な顔料や道具を使って、すてきな作品ができていました。

来年の夏のイベントもお楽しみに！



びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー 本をみる、美術をよむ vol.9 荒井良二さんの本、たくさん揃っています！

企画展「new born 荒井良二 いつもしらないところへ たびするきぶんだった」にあわせ、展覧会で原画が展示されている荒井良二さんの絵本をご紹介します。このほかにも荒井さんの本をたくさん揃えていますので、展覧会のあとはぜひ「びブラリ」にお立ち寄りください。



「びじゅつライブラリー」とは、千葉市美術館4階にある図書室です。美術にまつわる親しみやすい本を、約4,500冊配架しています。ぜひふらっと遊びにきてください！

『はっぴいさん』



物語の主人公は「ぼく」と「わたし」。ふたりはそれぞれ、こまったことやねがいごとを聞いてくれるという「はっぴいさん」に会うために山にのぼります。はたして「はっぴいさん」には出会えたのでしょうか？

『たいようオルガン』



「たいようオルガン」に見守られ、たくさんの人を乗せて走る「ソウバス」。リズムを刻むようなほがらかなテキストと、小さく説明文が添えられた大胆なイラストレーションに、思わず笑みがこぼれる一冊です。

『あさになったのでまどをあけますよ』



朝、窓を開けるというなにげない行為をとおして、さまざまな場所、さまざまな生活を想像させる物語。風景を中心としたイラストレーションはとても美しく、まるで目の前にその景色が広がるかのようです。

『きょうはそらにまるいつき』



赤ちゃんにも、バレエの練習帰りの女の子にも、遠い海のクジラにも、ごはんを食べ終えたおじいちゃんとおばあちゃんにも、ひとしく月は輝きます。「みんなのよるにそれぞれのよるに」ごほうびのようなおつきさま。

『山のヨーナ』



「山形ビエンナーレ2018」に出展した、荒井さんの同名の作品にまつわる絵本。山で生まれ、山で暮らし、山でお店を営むヨーナの日々が描かれています。企画展でも「ヨーナのみせ」がふたたび登場します。

『ゆきのげきじょう』



お父さんのだいじな本を破いてしまった男の子。雪一面の外にスキーで飛び出すと、うっかりくぼみに落ちてしまいます。そこには、小さく美しい劇場がありました。真冬のふしぎな出会いを描いた物語です。